

## イザヤ書61-63章「シオンへの情熱」

### 1A シオンの建て直し 61

1B メシヤの油注ぎ 1-3

2B 主の祭司 4-11

### 2A シオンの見張り 62

1B 主の輝かしい冠 1-5

2B 主の城壁の守り 6-12

### 3A シオンの贖い 63

1B 復讐の日 1-6

2B 古の主の憐れみ 7-19

## 本文

イザヤ書 61 章を開いてください。私たちは、イザヤ書のクライマックスに入っています。前回、60 章において、主が栄光をもってエルサレムに戻って来られて、エルサレムが主の栄光によって輝いている部分を読みました。そこに国々が自分たちの財宝を持ってきて、エルサレムに献納します。そして外国人たちが城壁を建て直し、門は開かれたままです。つまり、これまで自分たちを虐げてきた敵が、キリストにひれ伏し、もはや自分たちに敵対しない、むしろすべてがキリストにひれ伏すというところを読みました。このように、シオンが神の救いの完成、その目標となっています。

それは私たちにとっても、同じだということです。イエスが戻って来られて王となられるそのエルサレム、また神の国に入ることが私たちの目標です。アダムの時以来失われていたもの、地を支配すること、神にあって生き、神の富をキリストにあって他の人々に分け与えていくという、本来の人間の姿に戻ります。これを「栄化」と呼びます。神とキリストが持つておられる父と子の関係の中に、私たちを招き入れてくださいました。キリストが私たちの兄弟となってくださり、そして私たちが神を父と呼ぶことができるように、キリストご自身が長子となってくださったのです。こうやって私たちは神の子どもと呼ばれて、そして後の日に体も贖われて、神の栄光に輝くのです。その輝きをもって、キリストが御国を統治されるように、共に統治します。

### 1A シオンの建て直し 61

そして、主は続けてイザヤを通して、シオンに対して語ってくださいます。

### 1B メシヤの油注ぎ 1-3

61:1 神である主の霊が、わたしの上にある。主はわたしに油をそそぎ、貧しい者に良い知らせを伝え、心の傷ついた者をいやすために、わたしを遣わされた。捕われ人には解放を、囚人には解放を告げ、61:2 主の恵みの年と、われわれの神の復讐の日を告げ、すべての悲しむ者を慰め、

61:3 シオンの悲しむ者たちに、灰の代わりに頭の飾りを、悲しみの代わりに喜びの油を、憂いの心の代わりに賛美の外套を着けさせるためである。彼らは、義の樅の木、栄光を現わす主の植木と呼ばれよう。

シオンが、灰の中にあります。そこにいる者たちは廃墟の中にいます。けれども、ここにある「わたし」すなわち、主のしもべ、メシヤが恵みによる解放を与えてくださいます。貧しき者、心が打ち砕かれた者には罪の赦しと癒しを、そして縛られている者には解放を与えられますが、それを「主の恵みの年」と呼んでいます。午前礼拝で学びましたように、これはヨベルの年で、刷新の時です。これまで奴隷にされていたものが解放され、自分の家に戻ることができ、土地を売った者のところに土地が戻ってきて、神の大きな恵みによって万物に贖いと解放、回復が与えられるのです。

イエス様が初めに来られた時に、この贖いを行われ始めました。主は確かに、1 節にあるように、ご自分の宣教の働きに当たって、ヨルダン川でバプテスマを受けられた時に、御霊がこの方の上に留まりました。そして御霊に満たされて、ガリラヤにおいて「神の国が近づいた。悔い改めなさい。」と言って、福音を宣べ伝えはじめられたのです。宣教の初期にナザレの会堂で、この箇所を読まれて、この言葉が実現したと宣言されました。そして、貧しくされている者、自分に失敗し、絶望し、力を失い、疎外されて、愛されるような者ではないと自覚している者たちに慰めを与えられました。そして、縛られている者たち、暗闇の力によって、サタンや悪霊によって縛られている者たちを解放されました。盲目は目が開かれ、耳の聞こえない者は聞こえるようになり、確かに解放が与えられたのです。そして何よりも、罪の束縛からの解放を、ご自身の流された血によって下さったのです。

主はこのように恵みを与えられましたが、復讐も与えます。神の国に反抗する勢力に対して、力で押しつぶし、打ち砕き、滅ぼされます。その幻は 63 章に来るとありますので、その時に読みましょう。そしてその贖いを完成されると、ここにあるようにシオンに慰めが与えられるのです。灰の中で嘆き、悲しんでいる者たち、憂いがある者たちが、かえって喜び、神を賛美する者たちへと変えられます。そして彼らが、「義の樅の木、栄光を現わす主の植木と呼ばれよう。」となるとあります。彼らが確かに栄化された者、神と正しい関係の中にいる者としてその土地に植えられています。

## 2B 主の祭司 4-11

61:4 彼らは昔の廃墟を建て直し、先の荒れ跡を復興し、廃墟の町々、代々の荒れ跡を一新する。  
61:5 他国人は、あなたがたの羊の群れを飼うようになり、外国人が、あなたがたの農夫となり、ぶどう作りとなる。61:6 しかし、あなたがたは主の祭司ととなえられ、われわれの神に仕える者と呼ばれる。あなたがたは国々の力を食い尽くし、その富を誇る。61:7 あなたがたは恥に代えて、二倍のものを受ける。人々は侮辱に代えて、その分け前に喜び歌う。それゆえ、その国で二倍のものを所有し、とこしえの喜びが彼らのものとなる。

廃墟となっていたエルサレムの町を、その義の樅の木と呼ばれる彼らが建て直し、一新させます。そして彼らは主の祭司となるとあります。他の外国人が牧畜や農夫となりますが、彼らは祭司となるとあります。これは、彼らが神の義を持っているので、神と人との仲介となっているということです。主はイスラエルを、「祭司の王国」にすると言われていました(出エジプト 19:6)。そして、キリスト者も、そのように呼ばれています。「1ペテロ 2:9 しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。」私たちは神のものとされ、人々に対して神を代表し、自分たちを通して神の恵みに触れていく、祭司の働きに召されています。神に仕えることによって、神を自分たちを通して知っていくようになる、その使命を担っています。

そして贖われたイスラエルに対して、主は、「あなたがたは国々の力を食い尽くし、その富を誇る。」と言われていました。これは、世界の富が神に仕えるために用いられていくようになるということでもあります。「二倍」という表現は、これまでに失ったものを取り戻すのみならず、さらに多くの祝福が待っているということです。使徒パウロは、将来のユダヤ人のことについてこう言いました。「ローマ 11:12 もし彼らの違反が世界の富となり、彼らの失敗が異邦人の富となるのなら、彼らの完成は、それ以上の、どんなにかすばらしいものを、もたらすことでしょう。」ユダヤ人がイエスをメシヤとして認めなかったことで、イエス様の名が世界中に広がっているのであれば、彼らが回復したら、どれほどの富をもたらすのかという問いかけです。とてつもない喜びであります。このことが将来、終わりの日に起こります！そこで、今、ここに喜びと踊りに満ちる約束があるのです。

61:8 まことに、わたしは公義を愛する主だ。わたしは不法な略奪を憎む。わたしは誠実を尽くして彼らに報い、とこしえの契約を彼らと結ぶ。61:9 彼らの子孫は国々のうちで、彼らのすえは国々の民のうちで知れ渡る。彼らを見る者はみな、彼らが主に祝福された子孫であることを認める。

主は公義の神なので、義とされたイスラエルを通して富の不公平な分配も正されます。そして、彼らに永久の契約を結ぶと宣言されます。主は、エレミヤを通して彼らに新しい契約を結ぶと言われました。イエス様が弟子たちに、ご自分の血が新しい契約の印であると言われましたが、その契約をもってイスラエルを終わりの日に祝福されます。そしてその子孫が、確かに神に祝福されている者たちであると国々が認めます。私たちも、御霊によってキリストの祝福を受けている者たちです。神を知らない人々が、私たちを見て、確かに霊的な祝福を与えている神を認めることができるかどうか？それが、主の祭司になっていることを示すバロメーターです。

61:10 わたしは主によって大いに楽しみ、わたしのたましいも、わたしの神によって喜ぶ。主がわたしに、救いの衣を着せ、正義の外套をまとわせ、花婿のように栄冠をかぶらせ、花嫁のように宝玉で飾ってくださるからだ。61:11 地が芽を出し、園が蒔かれた種を芽生えさせるように、神である主が義と賛美とを、すべての国の前に芽生えさせるからだ。

10 節の主語、「わたし」というのは、61 章 1 節にあった主のしもべ、キリストが語られている言葉です。主キリストご自身が、まるでご自身が救われた者であるかのように話しておられます。けれども、これは主のキリストご自身が、贖われた者たちと一つになり、兄弟となってくださったからです。先ほど話したように、父と子の関係の中に、キリストの内にある者は招き入れられました。それゆえ、私たちがキリストにあって神を父とし、私たちは神の子どもとなることができました。「ヘブル 2:11-12 聖とする方も、聖とされる者たちも、すべて元は一つです。それで、主は彼らを兄弟と呼ぶことを恥としないで、こう言われます。「わたしは御名を、わたしの兄弟たちに告げよう。教会の中で、わたしはあなたを賛美しよう。」」

そしてここでは、救い、正義、そして栄冠という文字、それから花嫁という言葉が出ています。このシオンに住む者に対して使われているこれらの言葉は、すべてキリスト者に対してもまた使われている言葉です。救いによって神の義を身にまっています。そして上の召しによって、神の栄冠を受けます。そして私たちはキリストの花嫁です。そして、先ほどは植木とありましたが、こちらでは園で芽生える種として形容されていますが、これまでなかったものが芽生えて実を結ばせる園のようになります。

## **2A シオンの見張り 62**

こうして、終わりの日における主のなされる、シオンの回復を見ましたが、そこに至るまで主は決してその幻をあきらめない、いつも、いつも覚えて、その目標に至るべく事を行われる情熱を読んでいます。

### **1B 主の輝かしい冠 1-5**

62:1 シオンのために、わたしは黙っていない。エルサレムのために、黙りこまない。その義が朝日のように光を放ち、その救いが、たいまつのように燃えるまでは。

主のしもべ、つまりキリストご自身が、エルサレムのために黙っていない、黙り込まないと言われています。それは、義が光を放つ、救いがたいまつのように燃えるまでと言っています。このことが実現するまで、決して希望を捨てることなく、いつも語っていて、あきらめない熱心を見ることが出来ます。ここまで私たちが読んできた、栄光に輝くエルサレム、そして救いと義、喜びと賛美に満ちるシオンについて、このような神の国が来るのだ、だからそこに向けて信仰の一步を踏み出そう、不断の努力をしようというのが、ここで話していることです。

そこに至るまでは困難があります。希望を失いそうになるようなこともあります。しかし、それでもこの希望と夢について語りつづけて、その時が来るのを待っているのです。主を待ち望む、神の国を待ち望むとは、「いつか来るのだから、何もしないで待っていよう」というものではなく、今すぐにも来てほしいものであり、でも今日も来ていないことに心を痛め、けれどもなおのこと、今日、御霊によって主の義と平和が自分の周囲に、社会に、世界に広がることを願うのです。終わりの

日を今の日にまで持ってくることによって、初めて待ち望むという行為をしていることができます。パウロがテモテに対して、そのような姿勢を教えている箇所があります。「2テモテ 4:1-2 神の御前で、また、生きている人と死んだ人とをさばかれるキリスト・イエスの御前で、その現われとその御国を思って、私はおごそかに命じます。みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。」御国を思ってしっかりと、御言葉を伝えます。良い時だけでなく、悪い時も行ないます。

62:2 そのとき、国々はあなたの義を見、すべての王があなたの栄光を見る。あなたは、主の口が名づける新しい名で呼ばれよう。62:3 あなたは主の手にある輝かしい冠となり、あなたの神の手のひらにある王のかぶり物となる。62:4 あなたはもう、「見捨てられている。」と言われず、あなたの国はもう、「荒れ果てている。」とは言われぬ。かえって、あなたは「わたしの喜びは、彼女にある。」と呼ばれ、あなたの国は夫のある国と呼ばれよう。主の喜びがあなたにあり、あなたの国が夫を得るからである。62:5 若い男が若い女をめとるように、あなたの子らはあなたをめとり、花婿が花嫁を喜ぶように、あなたの神はあなたを喜ぶ。

すばらしいですね、神の義があり、神の栄光があるので王たちの中でも輝いていますが、「新しい名」が与えられています。新天新地のエルサレムは、「新しいエルサレム」と呼ばれています。全て古いものが過ぎ去り、全てが新しなります。「新しくなる」というのは、主との関係が一新することです。ここでは、シオン、エルサレムは、「見捨てられている」とか「荒れ果てている」とか呼ばれていました。けれども今は、「わたしの喜びは彼女にある」「夫のある国」という新しい名が付けられるということです。例えば、主は、私たちが新しい歌で主をほめたたえることを望まれていますね。そこにも、新しくされた関係の中で、生きた神との交わりの中で主をほめたたえることを意味しています。そして将来は、終わりの日は、シオンに対してと同じように、天において新しい名が与えられることを願っています。「黙示 2:17 わたしは勝利を得る者に隠れたマナを与える。また、彼に白い石を与える。その石には、それを受ける者のほかはだれも知らない、新しい名が書かれている。」すばらしいですね、どんな名なのでしょう？一新された、大いなる輝かしい関係、親しい関係を示す名であることは間違いありません。

そしてエルサレムが、妻が夫に愛されるように愛されます。このことを、ゼパニヤも語りました。「あなたの神、主は、あなたのただ中におられる。救いの勇士だ。主は喜びをもってあなたのことを楽しみ、その愛によって安らぎを与える。主は高らかに歌ってあなたのことを喜ばれる。(3:17)」ただそこにあることを喜び、愛しておられます。主はそのように私たちを見ておられるのですね、ただ私たちがいるということを楽しみ、喜んで、愛しておられるのです。

## 2B 主の城壁の守り 6-12

62:6 エルサレムよ。わたしはあなたの城壁の上に見張り人を置いた。昼の間も、夜の間も、彼らは決して黙ってはいはならない。主に覚えられている者たちよ。黙りこんではならない。62:7 主が

エルサレムを堅く立て、この地でエルサレムを榮譽とされるまで、黙ってはいならない。

「見張り人」は、城壁の上で敵が来るかどうか、何か迫りくる危険はないか、上で見張っている人です。エルサレムが堅く立てられるまで、榮譽を受けるまで、しっかりと見張り、エルサレムのことについて黙ってはいならないと命じられています。とても大事なことです。これは、常に神の国のご計画と幻をしっかりと携えていることであり、その幻をしっかりと語り、また祈り、信仰によって守り続ける者たちのことでもあります。次の書物、エレミヤ書では主ご自身がご自分の言葉を実現するために見張っている、と言われてます(エレミヤ 1:11-12)。したがって、主が見張りの心を持っておられるのですから、私たちもそうでなければいけないということです。

私たちは、したがってこのように熱心に御言葉を見つめ、それについて今、この時代にどのように当てはまるのかを語り合い、毎日の生活の中でどのように生かされるのかを考え、祈るのです。私たちの社会の中には、怒涛のごとく情報が自分の頭に押し寄せてきます。その洪水のような知識の中で、私たちはそれでも神の国の幻を語るためには、しっかりと見張るという行為をし続けたいといけません。

62:8 主は右の手と、力強い腕によって誓われた。「わたしは再びあなたの穀物を、あなたの敵に食物として与えない。あなたの労して作った新しいぶどう酒を、外国人に決して飲ませない。62:9 取り入れをした者がそれを食べて、主をほめたたえ、ぶどうを取り集めた者が、わたしの聖所の庭で、それを飲む。」

士師記には、イスラエル人が育てた作物をミデヤン人が収穫時に取り去ってしまうことが書かれていますが、あのギデオンが恐れて酒ぶねの中で脱穀の作業をしていました。このようなことは二度とさせないと主は約束してくださっています。私たちは霊的に、自分たちに与えられている神の救いの賜物、そこにある自由や喜び、平安、そして愛が敵によって奪われないように、しっかりと守っていかないといけません。終わりの日にまで、私たちは絶えずこの世から奪われそうになります。しかし、しっかりと主にあって守り、そして最後にはその実を食べることができ、主の宮の中に捧げることができるようになります。

62:10 通れ、通れ、城門を。この民の道を整え、盛り上げ、土を盛り上げ、大路を造れ。石を取り除いて国々の民の上に旗を揚げよ。62:11 見よ。主は、地の果てまで聞こえるように仰せられた。「シオンの娘に言え。『見よ。あなたの救いが来る。見よ。その報いは主とともにあり、その報酬は主の前にある。』と。62:12 彼らは、聖なる民、主に贖われた者と呼ばれ、あなたは、尋ね求められる者、見捨てられない町と呼ばれる。」

再び、散らされた民がエルサレムに帰還するための道備えについて、呼びかけがあります。エルサレムの城門までの道、その大路をしっかりと造りなさい、そしてつまずくことがないようにしなさい

と言っています。そして主が、「見よ。あなたの救いが来る。見よ。その報いは主とともにあり、その報酬は主の前にある。」とあります。忍耐して待っていた者たちには、報いが与えられるのです。そして最後に、聖なる民、贖われた者となります。終わりの時には必ず報いがあります。イエス様が戻られる時に、この言葉を使われます。「見よ。わたしはすぐに来る。わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来る。(黙示 22:12)」

### **3A シオンの贖い 63**

そして主は、これらシオンに住む民を妨げ、虐げてきた者たちを復讐することを予告しております。61章2節で「主は恵みの年と、われわれの神の復讐の日を告げ」と言われたところです。

#### **1B 復讐の日 1-6**

63:1 「エドムから来る者、ボツラから深紅の衣を着て来るこの者は、だれか。その着物には威光があり、大いなる力をもって進んで来るこの者は。」「正義を語り、救うに力強い者、それがわたしだ。」63:2 「なぜ、あなたの着物は赤く、あなたの衣は酒ぶねを踏む者のようなのか。」63:3 「わたしはひとりで酒ぶねを踏んだ。国々の民のうちに、わたしと事を共にする者はいなかった。わたしは怒って彼らを踏み、憤って彼らを踏みにじった。それで、彼らの血のしたたりが、わたしの衣にふりかかり、わたしの着物を、すっかり汚してしまった。63:4 わたしの心のうちに復讐の日があり、わたしの贖いの年が来たからだ。63:5 わたしは見回したが、だれも助ける者はなく、いぶかったが、だれもささえる者はいなかった。そこで、わたしの腕で救いをもたらし、わたしの憤りを、わたしのささえとした。63:6 わたしは、怒って国々の民を踏みつけ、憤って彼らを踏みつぶし、彼らの血のしたたりを地に流した。」

メシヤ、キリストの衣が真っ赤に染まっています。この光景を見て、これは十字架による血だとまず思うかもしれませんが違います。神に敵対する者どもを殺して、その返り血が主の衣に付いた、その血です。

まず歴史的な背景を知らないといけません。ボツラはエドムの首都であった町です。エドムはイスラエルよりも弱い国でした。主が、「弟が兄に仕えるようになる」と、エサウとヤコブについてお語りになったように、です。けれども、イスラエルが弱まった時には必ず攻撃してきて、イスラエルに対する屈折した憎悪を吐き出していました。しかしこの姿は、ここの預言ではエドム人ではなく、エドムのように神に敵対するすべての国々に対して語られています。イスラエルに敵対し、そして神ご自身に敵対する国々に、主が激しい怒りを現されるのです。そしてボツラという名称は、元は「ぶどうを集める」ことを意味します。かつてエドムの首都であり、今のヨルダンの「ペトラ」ではないかと言われます。主は、ご自分の敵をぶどうの実を集めて、それを酒ぶねに入れて押し潰し、ぶどう汁が出てくるように、主が彼らを踏み潰すことを予告されています。

これが黙示録 14 章で次のように預言されています。「また、もうひとりの御使いが、天の聖所か

ら出て来たが、この御使いも、鋭いかまを持っていた。すると、火を支配する権威を持ったもうひとりの御使いが、祭壇から出て来て、鋭いかまを持つ御使いに大声で叫んで言った。『その鋭いかまを入れ、地のぶどうのふさを刈り集めよ。ぶどうはすでに熟しているのだから。』そこで御使いは地にかまを入れ、地のぶどうを刈り集めて、神の激しい怒りの大きな酒ぶねに投げ入れた。その酒ぶねは都の外で踏まれたが、血は、その酒ぶねから流れ出て、馬のくつわに届くほどになり、千六百スタディオンに広がった。(14:17-20)」都、つまりエルサレムの外で 1600 スタディオンつまり約 300 キロに、血の海が広がります。黙示録 19 章には、再臨のイエス様が血に染まった衣を着ていて、そして国々の民を打つとあります。猛禽類の宴会が始まり、主によって打たれた死体をそれらが食い漁ることが預言されています。

黙示録 12 章には、イスラエルの残された者が、蛇の前を逃れて荒野に行くことが記されています。そこで蛇また竜が彼女を飲み干そうとするのですが、地が彼女を助けて、大水を飲み干したとあります。この荒野がボツラの辺り、今のヨルダンではないかと考えられます。イエス様は、このエドムの山地を「山」と言われて、エルサレムにいる者たちに逃げなさいと警告しておられます。「マタイ 24:15-16 それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす憎むべき者』が、聖なる所に立つのを見たならば、(読者はよく読み取るように。)そのときは、ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。」反キリストを中心にした全世界の軍隊は、荒野に逃れたイスラエルの民を完全に滅ぼそうと戦いに出ます。その時に天から来られた再臨のイエスが、彼らに戦われます。そして戦いはエルサレムのほうまで及びます。この時の様子を、ここイザヤ書 63 章は描いているのです。ヨルダンからイスラエル一帯で最後の戦い、ハルマゲドンの戦いが繰り広げられ、イスラエルそして神ご自身に敵対する者ども、世界の軍隊をことごとく滅ぼされるのです。

主は、ご自分で彼らを救うと言われています。他に救いを助ける者はまったくおらず、お独りで戦われます。救いというのが、人の助けによって成し遂げられるものではないことを物語っています。

そして、ここで主が復讐をされるという言葉、これは絶えず私たちの心に留めておかなければいけないことです。なぜなら、信仰をもって生きるということは、この世からの反対を絶えず受けているということです。そこには不条理が当然数多くあります。生活の中で信仰を持たないで生きた方が、絶対に得する環境があります。けれども、主がこれらの捻じれをすべて正される時を持っておられるのだということを知る必要があります。ですから、私たちは環境の中の被害者になってはいけません。「私はこんなにひどい目に会っている。」という自己憐憫の中に陥ってもいけないし、恨みや怒りを持ってはいけない。全ては主が終わりの日に裁かれるのです。主が何とかしてください、そして主に全てを任せて、自分は主に命じられたことを守ればよいのです。

## 2B 古の主の憐れみ 7-19

63:7 私は、主の恵みと、主の奇しいみわざをほめ歌おう。主が私たちに報いてくださったすべての事について、そのあわれみと、豊かな恵みによって報いてくださったイスラエルの家への豊かな

いつくしみについて。

預言者イザヤが、ここまでの幻を受けて主をほめたたえています。主が憐れみと、豊かな恵みによって報いてくださることを、ほめたたえています。私たちが、この豊かさに預かっていることを知る必要がありますね。そこに対する信仰を持ち、そして主をほめたたえていきたいです。「ローマ 9:16したがって、事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。」

63:8 主は仰せられた。「まことに彼らはわたしの民、偽りのない子たちだ。」と。こうして、主は彼らの救い主になられた。63:9 彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。63:10 しかし、彼らは逆らい、主の聖なる御霊を痛ませたので、主は彼らの敵となり、みずから彼らと戦われた。

ここ 8 節から 10 節は、主からの語りかけになっています。エドムに免れたイスラエルの残りの民に対して、主が語っておられる箇所です。そして、その言葉を聞いた時に救われているようにはまだ見えない状態なので、祈りを捧げます。それが 64 章まで続きますが、今日は 63 章までを読みます。

まず、主はここで「偽りのない子たちだ。」と呼ばれています。これは、主がそのようにみなしておられる言葉です。イスラエルが荒野の旅をしている時に、多くの罪を犯しました。けれども、モアブの野で宿営をしている時、バラムがこのように預言しました。「ヤコブの中に不法を見いださず、イスラエルの中にわざわいを見ない。(民数 23:21)」そして、主が彼らを愛し、憐れみ、これまで抱いてこられたことを語っています。けれども、主の聖なる御霊を悲しませたので、主が彼らを取り扱わなければいけなかったと言われます。私たちが同じような取り扱いを受けることがあります。赦しがあるところに、赦しがなくなってしまうような時です、聖霊を悲しませるということです。「エペソ 4:30 神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。」

63:11 そのとき、主の民は、いにしへのモーセの日を思い出した。「羊の群れの牧者たちとともに、彼らを海から上らせた方は、どこにおられるのか。その中に主の聖なる御霊を置かれた方は、どこにおられるのか。63:12 その輝かしい御腕をモーセの右に進ませ、彼らの前で水を分け、永遠の名を成し、63:13 荒野の中を行く馬のように、つまずくことなく彼らに深みの底を歩ませた方は、どこにおられるのか。63:14 家畜が谷に下るように、主の御霊が彼らをいこわせた。」このようにして、あなたは、あなたの民を導き、あなたの輝かしい御名をあげられたのです。

終わりの日に、主に立ち返ろうとするイスラエルの残りの民は、イスラエルの始めの出来事を思い出します。イスラエルが民族として誕生するモーセの日を思い出します。彼らにとっては、ずっと、

ずっと前の話です。はるか昔のことなので、今の自分たちとは関係がないように思われます。けれども彼らには信仰があります。古のモーセの日に生きておられた神は、今、私たちが信じる神と同じであるということ。力強い業を行なわれた主、救いの業を行なわれた主がおられました。そして同じ主が今もおられるのだ、という信仰告白です。私たちにとって、どうでしょうか？同じ信仰を持っているのでしょうか？現代と聖書時代は違うから、という思考形式がどうしても私たちを支配してしまいます。

63:15 どうか、天から見おろし、聖なる輝かしい御住まいからご覧ください。あなたの熱心と、力あるみわざは、どこにあるのでしょうか。私へのあなたのたぎる思いとあわれみを、あなたは押えておられるのですか。63:16 まことに、あなたは私たちの父です。たとい、アブラハムが私たちを知らず、イスラエルが私たちを認めなくても、主よ、あなたは、私たちの父です。あなたの御名は、とこしえから私たちの贖い主です。

主は、聖なる御住まいにおられるという認識です。神は天に御座を持っておられる方です。したがって、力と熱心は、昔のモーセの日からではなく、天から直接下りてきます。そして、モーセよりもさらに遡って、アブラハムという彼らの父祖を取り上げて、彼の神のことを「私たちの父」と呼んでいます。聖書の神を自分自身の父と呼んでつながろうとしているのです。これが、私たちの信仰をもった祈りの方法です。たとえそれが昔の話であっても、イエスは今も、昔も、これからも変わらない方なのです。

63:17 主よ。なぜあなたは、私たちをあなたの道から迷い出させ、私たちの心をかたくなにして、あなたを恐れないようにされるのですか。あなたのしもべたち、あなたのゆずりの地の部族のために、どうかお帰りください。63:18 あなたの聖なる民がこの地を所有して間もなく、私たちの敵は、あなたの聖所を踏みつけました。63:19 私たちは、とこしえからあなたに支配されたことも、あなたの御名で呼ばれたこともない者ようになりました。

彼らは、今の状況を訴えています。ユダヤ人の多くが、主を恐れていないという状況があります。さらに、ゆずりの地も反キリストに踏み荒らされてしまっています。聖所には、自分自身が入って、神であると宣言しています。これではまるで、神を元々信じていなかった時と変わらないのではないですか？と訴えているのです。これは私たちにもある訴えではないでしょうか？時に、キリスト者に約束されていることが、まるで無くなったかのような感覚に襲われることがあります。そして彼らは、次の章で初めて主が彼らに現れた時のことを再び思い出し、自分たちの神に懲らしめを受けている状況を言い表します。

昔も今も変わらない方であることを覚えましょう。そして、たとえそのように見えなくても、エルサレムのために黙っていない、ずっと見張っているとされた主の心を持って、主が確かに真実を尽くして、御言葉を行われることを信じていきましょう。